

## 机上の花

刈 萱 女

頭髪を高島田に結つた、十六七の可愛らしい小間使が、火鉢と蓆とを持つて入つて来て、

「最う直ぐに被來いますから、少時お待ちなすつて。」  
と三ツ指の丁寧な挨拶を殘して閑雅に出て往くと、  
迹はお新一人になつた。

二方に廊下を控へた、風通りの宜い四疊半で、庭に向つた窓際に檜の丸脚の机が一脚、手摺のした聖書、家庭雜誌らしいのが二三部、其横に鉢植のクラシメンが、朱鷺色の美しい花を、拭き込んだ机の上に映してゐる。

お新は薦められた蓆の上に、恐々片膝を乗せて、帯の間へ挿んだ袖入の貰入を出して、漸う落着いた態に貰を喫始めた。此邸へ来る迄は氣ばかり急いで顔も身體も豁然とした汗に潤つて居たが、氣が静ると同時に急に張が抜けて、そよくと窓掛を揺がす青葉の風は、何だか生を新たにしたりやうにすがすがしい。彼は片手を後に突いて、窓から見える森とした庭の花欄、羅漢松、枝態の面白い赤松、それから楣間の油畫の、大洋の中に海鳥の飛ぶ態などを、我れにもなく見込んで居たが、ふと廊下を通る聲音が、室の前で止つたので、急いで衣紋を整して端然となる。

静かに襖を開けて入つて来たのは、頭髮を潰した様な廂髪に結つた色の白い、鉛仙の袷に白襟を襲ねた、此伯爵家の家庭教師——お新の實姉の基子で、

「おや、新ちゃん、克くお出てねえ。」

と可懐げに謂つて、傍に寄る。妹の世帯じみて神經質らしいのと反對に、舉動が何となく活々して、人に依つては却て姉を妹かと疑ふ程である。

「暑くなつてねえ、何時頃お出でなの？」

「十分ばかり前よ、最う全然御用は済んで？」

「あ、今坊ちやまのお稽古をしてゐて……。最う是で夕方まで何も用はないのよ、今日は悠然遊んでおいでも宜いでせう。」

そこへ小間使が菓子皿と茶器とを運んで這入つて来る。

「おや憚り様、お茶は私が容れますから……。」

小間使が出て往くと基子は急須の茶を茶碗に移して、お新に薦め乍ら、

「さお上り。それから此お菓子一つ食べて御覽。」

「なに？怪しなものね。」と珍し相に菓子皿を覗いて居たが、聽て其一片を恐々口に入れる。

「あら、然うぢやないわ、ホ……、其錫箔は排つてお上り。」

「おや然う、私如何も變だと思つたけれども……。」

顔を紅うして笑ひ乍ら、熱心に味はつて居たが、

「何だか牛皮菓のやうに甘つばいお菓子ね。何と云ふたの。」と云切つたが、其眼は最う涙が充滿になつて居た。

「別れる？ まあ一體何が原因で那麽事を謂出すの、如何したのか譯をお聴かせよ。」

「譯も何もありやしないわ、彼様な意氣地のない人に密着して居ちや、何時頭が上がるか先途の見込が無いんだもの、私今日と云ふ今日は眞箇に心を定めて相談に来たのよ、此先も一緒に居ちや、それを被るもの一つ無くされて了ふわ、顯らかな話なんだもの、御覽よ、お邸へ上るにさへ、此様な着物で追ひ出すぢやないの。」と云つたが、お新の良人と云ふのは、今さる私立の鐵工所の書記に備はれて居るのであるが、生中の傲氣が毎も仇をなして、彼が半生の歴史を洗へば、殆んど失敗の連続と云つて宜い位である。

基子は黙つて聽いて居たが、

「それで何、あの人は新ちゃんに始終辛くても當るの？」

「まあ、此様な貧乏して此上辛く當られちや堪りやし

名？」

「チヨコレットと云ふ西洋のお菓子よ、宜かつたら澤山お上り。」

「否最う澤山。何だか口がねばくする程甘いものね。」

話は些と途断れて、基子は又新しい茶を急須に容れる。お新は黙つて貰を味はひ乍ら庭を眺めて居たが、少時すると、

「今日はねえ、姉さん。」と急に眞顔の淋しい眼色して基子を見る。

「如何したの。」

「私今日は姉さんに相談があつて来たのよ。」

「相談？ 何だね急に改つて……。」と妹の顔を覗いて笑つたが、

「ま、何だか謂つて御覽。如何したの？」

お新は少時俯向いて膝の手帕を弄くつて黙つて居たが、急に、

「私最う、あの人と断然別れて了はうと思つて出て來

たの。」と云切つたが、其眼は最う涙が充滿になつて居た。

「別れる？ まあ一體何が原因で那麽事を謂出すの、如何したのか譯をお聴かせよ。」

「譯も何もありやしないわ、彼様な意氣地のない人に密着して居ちや、何時頭が上がるか先途の見込が無いんだもの、私今日と云ふ今日は眞箇に心を定めて相談に来たのよ、此先も一緒に居ちや、それを被るもの一つ無くされて了ふわ、顯らかな話なんだもの、御覽よ、お邸へ上るにさへ、此様な着物で追ひ出すぢやないの。」と云つたが、お新の良人と云ふのは、今さる私立の鐵工所の書記に備はれて居るのであるが、生中の傲氣が毎も仇をなして、彼が半生の歴史を洗へば、殆んど失敗の連続と云つて宜い位である。

基子は黙つて聽いて居たが、

「それで何、あの人は新ちゃんに始終辛くても當るの？」

「まあ、此様な貧乏して此上辛く當られちや堪りやし

ないわ、姉さん、あの人の親切はね、皆私の衣服を脱がそうつて鼻樂の親切よ。」

「然う新ちやんの様に僻んで了つては詮方がないねえ。」と基子は凝然と妹の顔を凝視めて居たが、

「ぢやね、新ちやん、新ちやんは宜い衣服を被たり、物見遊山に出掛けらるばかりが何よりの幸福とお思ひ？これは新ちやんだからお話しするけれどね、……此邸のお上様——奥様のお身分は新ち



「やん幸福とお思ひか何とお思ひ？」

だからお話し爲ませうよ。

「——何時か私はお上様のお伴を申上げて絞ヶ橋のあのお邸——これも伯爵家のね——へ参つた時よ、お歸途はお氣の詰るお馬車よりも、お歩ひも偶には晴々して宜いからと仰せ遊ばして、丁度日の暮方、あの汚らしい貧民窟をお話し申し乍ら通つて来たのよ、すると、お上様はふとお立寄りになつて、何物やら凝視と御覽遊ばした儘動かうとも遊ばさないでねえ——見ると裏までも一目に見える汚い荒屋に煤けた行燈が點いて居て、四五人の親子らしいのがお夕飯の最中よ、それ

でね、  
「お上様、下層の者の暮らし向は此様なさもしいもので御座います。」と申上げると、お上様ははらくと涙をお零し遊ばして、  
「まあ、うらやましいことねえ」と搾る様のお聲で仰せ遊ばすのよ。

新ちやん！新ちやんは此御言葉を何とお聴きか？：御身分と謂ひ、お暮らし向と云ひ、何一つ御不足の遊ばそう筈のないお上様が「笑しい」と迄仰せ遊ばす

お心の中！これはね、御家庭に尊い愛と云ふものが缺けて居るからよ……!!

お殿様の事は私何もお話し爲ませんわ、唯、時にはお二方が一週間もお言語一つお交し遊ばさない事が折折ある——然う謂へば、新ちやんも大略お推察が出来て、内部に隠れた悲哀はお分りにならないのよ。況して新ちやんの配合は新ちやんを幸福にしようと思へばこそ、種々な事にも手を出すのではないの、是が連惡く皆夫敗に終つたから、新ちやんにも其様な不足が云へるのでせう、まあ吾儘な……年中心の美しいお慰藉とては探してもなく、淋しうお過し遊ばすお上様のお心の中をお察し！被物位が何でせう!!——其様な吾儘はお言になれるもので無からうと、私染を思ふのよ。ね、新ちやん、生意氣を言ふとお思ひでせうがね、熟考へ直して御覽、榮華の夢に酔ふばかりが人生の目的とは私には如何しても思へないわ。新ちやん、新ちやんは如何お思ひ？」

「姉さん、私は何も華族様の夫人にならうつて謂ひやしないわ。」  
「それは然うでせうが、それでも、矢張お幸福な御身分位には、お思ひでせう、それで、其様な不平も出て来るのよ。私は何も拗く謂はうとはしませんかね、丁度宜い折

常には物を多く言はぬ基子が、その最愛の妹の爲に、斯うまで説き續けて漸く興奮した聲の終つた直——二人の瞳のはしなく合つた時！ お新の眼からは、熱い涙が胡蓮の糸を索く様に流れた。

「姉さん、私が悪かつた！」

「お、新ちゃん！」

基子も思はず叫んで、姉と妹の手を執つた儘、握りしめる。

窓掛を白く翻へして吹いた風は、基子が机の上の花を揺つて、寄添つて泣く姉妹の鬢を僅かに吹いて。